2026/10/11

於：大阪電気通信大学

特別講演

メディア英語の奥行きの深さに魅せられて：好都合な虚構世界の制作[1]

石上文正（人間環境大学）

1)「メディア」の定義

第一義：「古い一般的な意味で、あいだに入ったり、媒介する作用や実体」（ウィリアムズ, R.（1983 / 2002, p. 203）『完訳　キーワード辞典 (椎名美智 他, 訳)』. 平凡社, p. 203）

英和辞典（『ライトハウス英和辞典』）の定義：①「（2 つのものをつなぐための）手段、方法；媒介（物）」、②中間、中庸、中位、③環境、生活条件、④みこ、霊媒

（注：③の例：Slums are a poor medium for developing good citizens. 他の英和辞典には「生物の生活環境[条件]」という意味が示されている）

2) マクルーハンの「メディア」

マクルーハン（1965, p. 7）は人間とメディアの関係を次のように述べている：「いかなるメディア（すなわち、われわれ自身の拡張したもののこと）の場合でも、それが個人および社会に及ぼす結果というものは、われわれ自身の個々の拡張（つまり、新しい技術のこと）によってわれわれの世界に導入される新しい尺度 (scale) に起因する・・・。」

例えば、「孫の手」は、手の拡張である。自分の手と背中を繋ぐ媒介物であるのでメディアである。

3) マクルーハンの主要概念

“the medium is the message（メディアはメッセージである）”（マクルーハン, 1965, p. 7）

一般的には、メディアはメッセージを伝えるものと考えられるが、メディアそのものがメッセージであるという考え。平安時代では、ひらがなは、漢字に比べて単純であり、表音文字のため、思考・感情を直接的に表現する（思考・感情の拡張）のに適していたと考えられる。この「ひらがな」というメディアは、女性に「女よ、筆をとって自由に表現しよう」というメッセージを与え続けていたのではないだろうか。「ひらがな」という「技術」が導入されることによって、女性と文学の距離・関係性（尺度）が身近になった考えられる。このことをさらに拡張して言えば、メディアが変われば、私たちの生きている世界の有り様が変わるということになる。

4) ヒトの生得的メディア（ニューロン・神経細胞）および脳と環境世界

「真紅なポルシェ」のポルシェの色は赤か？赤という色は存在するか？これらは意外に難しい問いである。

私たちがポルシェを「赤」だと感じるとき、太陽光線のある波長の電磁波が、そのポルシェに当たって、反射したものが眼に入り（それ以外の電磁波は、ポルシェに吸収される）、それに反応する視細胞（錐体細胞）を刺激する。その結果、そこにある化学物質が化学変化を起こしそれが化学信号となり、それが電気信号（インパルス）を発生させ、その電気信号が神経細胞（ニューロン）を伝わり、神経細

胞の末端に到着し、次にまた化学物質が次のニューロンに伝えられ、それがまた電気信号を発生させる。このように、私たちのニューロンというメディアは、化学信号と電気信号を伝える媒体で、それらの信号は他の周波数の電磁波に反応する視細胞に連なるニューロンと同じ化学・電気信号を伝えるだけである。ある意味で、各ニューロンは、それぞれがどのような電磁波（例えば 565 ㎚）の刺激を受けたという「意味」を伝えるのではなく、たんに刺激があったということを伝えているだけなのかもしれない。もしそうなら、ニューロンそのものは「色情報」を伝えているのではないということになる。「色」は脳などで構成されていることになる。ヒトはある周波数の電磁波をある色として知覚する（遺伝子の違いによってすべてのヒトが同じであるというわけではない）が、別の生き物は同じ周波数の電磁波を別の色として感じているのかもしれない。モンシロチョウやミツバチは紫外線を色として知覚することができるので、同じ花畑をヒトとは異なった色の世界として感じているようだ（小原, 2003)。私たちヒトが感じている色世界は、ヒト固有の世界であって、それがすべての生き物にとっての「真実」ではないと言えそうだ。

ポルシェは、赤を反射しているので、赤はポルシェの属性ではないと言えるかもしれない。私たちは、私たちが見ている事物の色は、その事物に備わっていると一般的に考え、世界は色に満ちているという世界観をもって生きているが、「正しい」のだろうか？

私たちは、**色の「修正」**を行っている。網膜のある細胞は、強い刺激の色刺激の周辺の色を抑制する機能もあり、それによってコントラストが高められているようである。つまり、私たちが見ているくっきりした色風景は、電磁波が伝えている情報を修正し、より鮮明にしているようである。間違った例かもしれないが、印象派の画家たちが描くボンヤリした風景・人物（例えば、モネの「散歩、日傘をさす女性」）のほうが、より「真実」の色世界を表現しているのかもしれない。

私たちは、見えないものをあたかも見えているように見せる補正もしている。網膜上には視細胞の刺激を脳に伝える前に、網膜の神経線維が束になって（一か所に集められ）脳へ向かう出入口がある。網膜上のその所には視細胞（錐体細胞等）がないので、そこに入った電磁波は、刺激にはならない。そこには空白領域が広がっているために、刺激を感じることがない。これがいわゆる“盲点”である。下記の実験（マリオットの暗点テスト）を試みて下さい。まず、左目を閉じて、右目で左の黒丸を見てください。右の黒三角が消えるときがあるが、そこに穴があるとは感じません。この実験で、盲点があることが明らかになるが、日常生活では、盲点を経験しない（視界のなかに、空白領域を感じることがない)。

●　　▲

私たちの眼に入った像は、角膜・水晶体（レンズ）を通過するので網膜には倒立した像として映しだされているのに、私たちは、そのように見えていない。脳のどこかで反転作業が行われているとも考えられるがそうでもないらしい。私たちの身体が重力を感じる方向、今までの経験等の影響によって、それらと矛盾がないように正立（直立）していると知覚しているようである。

「逆さメガネ」というメガネがあって、それをかけて、どのように見えるかを調べる実験がある。網膜には、倒立像ではなく、正立像が映し出されているはずだが、多くの被験者は逆さの像を見ているよ

うで、気分が悪くなるようである。しかし、数日かけて生活すると、世界が正立像のように見えてくるという。

私たちが見ている世界は、視覚のみで構成されているのではなく、さまざまな感覚（重力の感覚）や経験の影響を受けて矛盾がないように、“都合よく”制作されているようである。ヒトの身体（とくに視覚関連の神経細胞や視覚に関わる脳の領域）や経験は、外界を解釈するための媒介（メディア）的な機能を果たしている。その機能は、ありのままの物理的世界ではなく、私たちにとって**“好都合な虚構世界＝現実世界”**を制作しているようだ。これを図示すると次のようになる。

(a) “現実世界(色の世界)” ―― メディアとしてのヒト ―― 物理的世界（可視光線、可聴周波数等）

5) 「物理的世界」というメディア

前項では、時間の経過を考えたプロセスに重点を置いた考察を試みた。この項では、どちらかというと、今、この空間という視点から、考えてみることにする。すると、上記の(a)とは矛盾しているような結論を導きだすことができるかもしれない。例えば、自然の美しい景色に面したとき、私たちはそこに色彩豊かな景色を見るであろう。しかし、その色彩はヒトが作成したものである。私たちは、物理的世界に面したとき、そこに二重写しのように、ヒトが作成した**“美しい現実世界”**を見ていると考えることができるだろう。“美しい”とは、人間の文化・価値観が造りあげたものと考えれば、私たちは、物理的世界を媒介（メディア）に、二重写しとしての**“美しいと価値づけられた現実世界(色の世界)”**を見ていると言えそうだ。これを図示すると(b)のようになる。

(b) “現実世界(色の世界)” ―― メディアとしての物理的世界（可視光線、可聴周波数等）―― ヒト

6) 英語というメディア

英語はことばである。言葉はメディアである。だから、「言葉はメッセージ」でもある。では、どんなメッセージを放っているのか？ ①名詞なら、その存在を確定・正当化 (バーガー・ルックマン(2003, p. 144))している。「雑草」という言葉は、その存在を認めている。「無意識」、「無」、「ゼロ」も「虚数」も存在している、もしくはそのように仮定しているらしい。②ある言葉は、それと対立するものの存在も認めている。「秩序」があるなら「無秩序」もある。③ある言葉は、世界の中に秩序（位置）づけられている。犬＜動物＜生き物。以上のことから、言葉によって、私たちの生きている世界は安定化、正当化され、安心して生活を営むことが可能になる。相手に名前があるから、安心して愛することも、憎むこともできるのかもしれない。言葉は、「私たちの生活は堅固で、安定しているので、安心しなさい」といったメッセージを出し続けているのかもしれない。ただ、最近こんな安定した世界に衝撃をあたえた大統領がいる。「太平洋」を「アメリカ洋」に変更しようという提案である。「太平＝pacific」とは、「平和で、穏やかな」といった意味のようだが、現在、「太平洋」は波高し、のようである。

7) 象徴的世界（symbolic universe）によって、世界は統合される

ことばによって世界は安定化するが、さらに、象徴的世界（symbolic universe）によって世界は統合される。バーガー・ルックマン (2003, p. 146) は、次のように述べている。「こうした世界（象徴的世界）はさまざまな意味の領域を統合し――先にわれわれが規定したような意味で〈象徴的〉ということばを

使うとすれば──制度的秩序を象徴からなる一つの全体性へと包括する、理論的伝統の総体である。繰り返して言えば、象徴的過程というのは、日常経験における現実とは異なった諸々の現実にかかわる意味づけ (signification) の過程のことをいう（カッコ内は発表者)。」

例えば、私たちは、「失業した」とか「会社がつぶれた」というような経験をするが、トランプ大統領は、外国がアメリカの会社を「盗み取り(stealing)」、仕事を「破壊し(destroying)」、「略奪する(ravages)」をおこなっている、と表現している。暴力的な象徴的言語を用いて、アメリカに被害をもたらす「外国」を象徴的世界内に設定し、彼は、従来の日常的世界とは別の象徴的世界に、人びとを誘い込んでいるのである。その必然的結果として、トランプ大統領は、アメリカを「防御（protection)」しなければならないし、そのため、外国と「戦う(fight)」ことと、その戦いに「勝つ (win)」ことが要請されている (石上, 2020)。これらは、彼がしばしば好んで使う象徴的言語である。

いっぽう、オバマ大統領は、「自由」、「平等」、「幸福の追求」、「希望」、「美徳」等の象徴的言語を用いて、トランプ大統領とは異なった象徴的世界を構築している(石上, 2020)。

8) メディア英語研究の主要なテーマ：権力者が制作している象徴的世界(虚構世界) を明らかにすること

ことばの一つひとつを注視すると同時に、象徴的世界――虚構世界――がいかに構築され、統合的世界が構築されているかについて考察することも、メディア英語研究の主要なテーマであると思われる。

注 1

本稿は、第 16 回日本メディア英語学会年次大会（2026 年 10 月 11 日、大阪電気通信大学）における「特別講演」に際して、会場で配布したレジュメに大幅な加筆・修正等をほどこしたものである。

参考文献

マクルーハン関連書籍

マクルーハン, M. (1965/ 1987).『メディア論：人間拡張の諸相（栗原裕・河本仲聖, 訳)』みすず書房.

視覚関連書籍

ブルーム, F.E. (1985, 2004).『新・脳の探検　上（中村克樹・久保田競, 訳)』講談社.

村上元彦 (1995).『どうしてものが見えるのか』岩波書店.

小原嘉明(2003).『モンシロチョウ　キャベツ畑の動物行動学』中央公論新社

象徴的世界関連書籍

バーガー, P.・ルックマン, T. (1966 / 2003).『現実の社会的構成──知識社会学論考（山口節郎, 訳)』新曜社.

石上文正 (2020).『天蓋としての大統領就任演説: オバマ大統領とトランプ大統領の比較』第一インターネットサービス. (Kindle 版)

Ishigami, F. (2023) *Presidential Inaugural Addresses as Symbolic Universes: Comparing the Rhetoric of Former Presidents Barack Obama and Donald Trump* (English Edition). First Internet Services. (Kindle 版)